

岩手大学
持続可能な社会のための教養教育
の再構築：
「学びの銀河」プロジェクト

岩手大学理事・副学長
玉真之介

注目はフィンランド

- ヨーロッパで最初に、国連「ESDの10年」の国内実施計画を策定(2006)
- 大学教育の重視:教育省編
”Towards Sustainable Development in Higher Education- Reflections” を公表(2007.6)
- ‘Education for a sustainable development in the university perspective’ by Paula Lindroos (Teachers Conference University Education for Sustainable Development :13 - 16 March, 2005 in Gdansk, Poland)

ポイント(1)

- Changes in society
- SD=University response to change
- **Institutional commitment**
- There should be courses on sustainable development **for all students.**
- **Links between EE and ESD**
- A healthy environment is a prerequisite for a vital economy in the long term.

ポイント(2)

- Key concept is SD: **Well balanced** in future generations and developing countries.
- SD is **a subjective concept**, which means that it cannot be imposed from above.
- It is formed by the **dialogue between different actors**.

報告内容

- 岩手大学のプロジェクト概要
- 背景とねらい
- 困難さと今後の展望

プロジェクトの概要と特徴(1)

- 全ての学生を対象、全ての全学共通科目*にESDを織り込む

* 学士課程教育 = 全学共通教育 + 専門教育(学部)

- 全学共通教育の目標は「新しい市民教育」
- 養成しようとする人材像

「環境問題をはじめとする複合的な人類的諸課題を生涯にわたって自らの課題と意識し続け、社会・地域・家庭の様々な場で、身の回りの具体的問題の解決にコツコツと取り組むような『21世紀型市民』」

全学共通教育の教育目標

- 「履修の手引き」平成19年度2007
- 教育目標：
「さらに、教育目標の達成に当たっては、国連「持続可能な開発のための教育 (Education for Sustainable Development: ESD) の10年」を共通に意識することに努めています。」
- 国連「ESDの10年」(幼稚園から大学まで、全ての分野でESD)に対する **Institutional Commitment**

プロジェクトの概要と特徴(2)

▪ 全学共通教育の構造化と可視化

1) コアを示す: 尊重の価値観＝思いやる心

2) ESDの環境・経済・社会・文化に従って領域を区分

3) 「関心の喚起」(タイプ1)「理解の広がりと深化」(タイプ2)

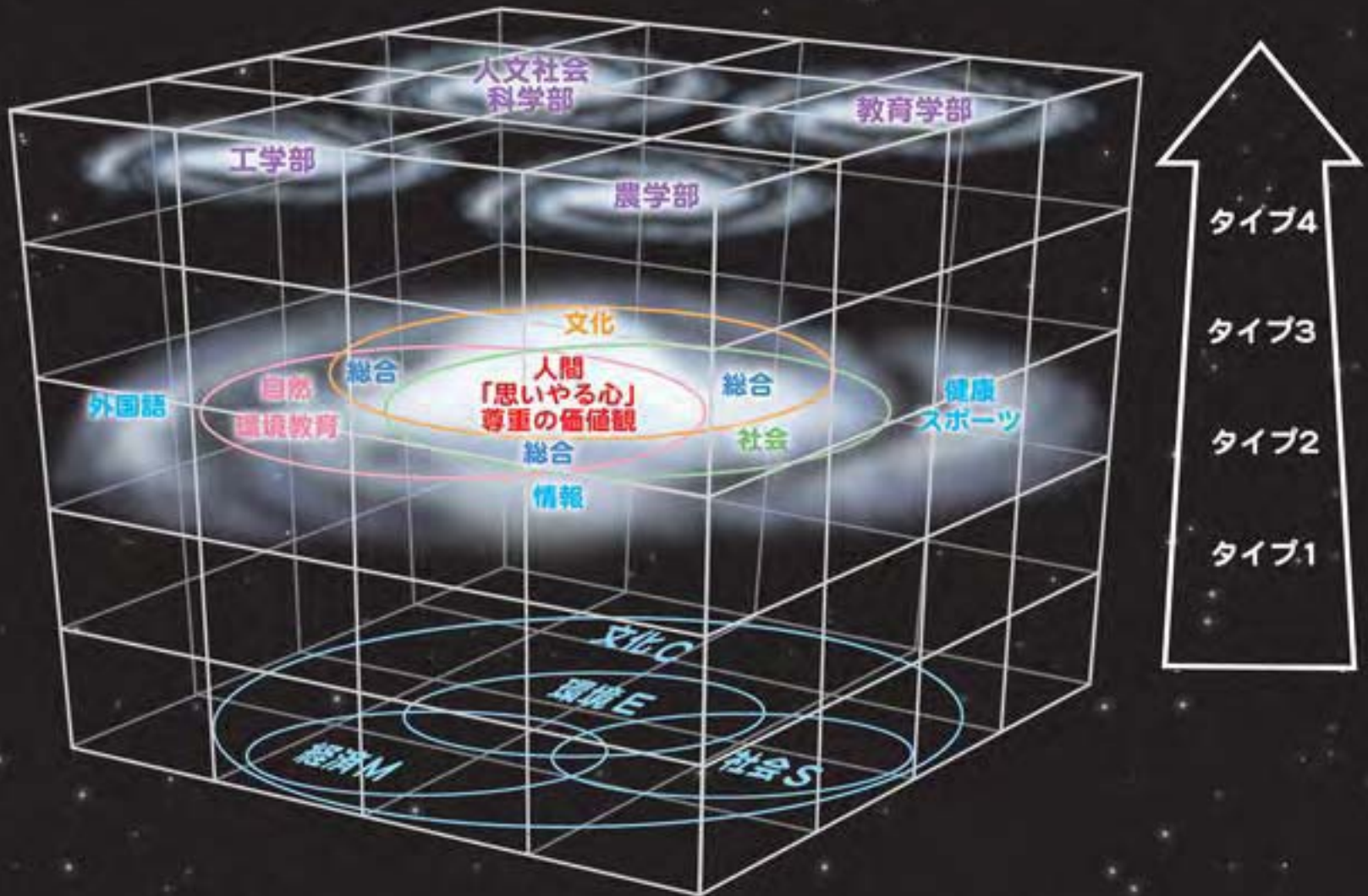
「学生参加」(タイプ3)「問題解決の体験」(タイプ4)に分類

▪ 「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という宮澤賢治のメッセージ

▪ 授業科目は星、星を結んで自らの星座を作る

Find your stars and build your own constellation in the
“Galaxy of Learning”!

ESD「学びの銀河」



全学教育科目の例

全学共通教育ESD科目(平成19年度)

	区分	授業科目名	種別	開講期	領域・タイプ
教養科目	人間と文化	言葉の世界	選択	前・後期	C-1
		日本の文学	選択	前・後期	C-2
		哲学の世界	選択	前期	C-1
		芸術の世界	選択	後期	C-2
		倫理学の世界	選択	後期	S・C-2
		心の科学	選択	前期	C-1
	人間と社会	経済のしくみ	選択	前期	M-1
		現代社会と経済	選択	前期	M-3
		現代社会と経済	選択	後期	S・M-1
		地域と生活	選択	前期	S-2
		地域と社会	選択	後期	S-2
		市民と政治	選択	後期	S-1

教養科目	人間と自然	数理のひろがり	選択	前期	C-1
		数理のひろがり	選択	後期	C-2
		自然と数理	選択	前期	E-1
		生命のしくみ	選択	後期	E-1
		物質の世界	選択	前期	C-1
	総合科目	岩手大学論	選択	後期	C-1
	環境教育科目	「環境」を考える	選択必修	後期	E-2
		生活と環境	選択必修	後期	E-2
		都市と環境	選択必修	後期	E-1
		農業・生命と環境	選択必修	後期	E-1
	高年次課題科目	男女共同参画の実践を学ぶ	選択	集中	S-4
		都市の自然再生プランニング	選択	集中	E-4

プロジェクトの概要と特徴(3)

- ・高年次教養科目(タイプ4:問題解決の体験)の開設
 - 平成19年度:男女共同参画の実践を学ぶ
 - 平成20年度:都市の自然再生プランニング
 - 津波の実際から防災を考える
 - 北上川自然体験指導
- ・専門性をある程度身に付けた3、4年生が地域の具体的な問題について学部を越えて学ぶ:専門の違いを尊重しながら協働する体験を期待

プロジェクトの概要と特徴(4)

・ESD副専攻の設置

平成21年度設置を目標

専門教育科目にもESD科目(領域+タイプ)

共通教育のESD科目単位一定数(例:10単位)

専門教育のESD科目単位一定数(例:8単位)

ただし、4領域をすべて含む、タイプ3、タイプ4が一定以上

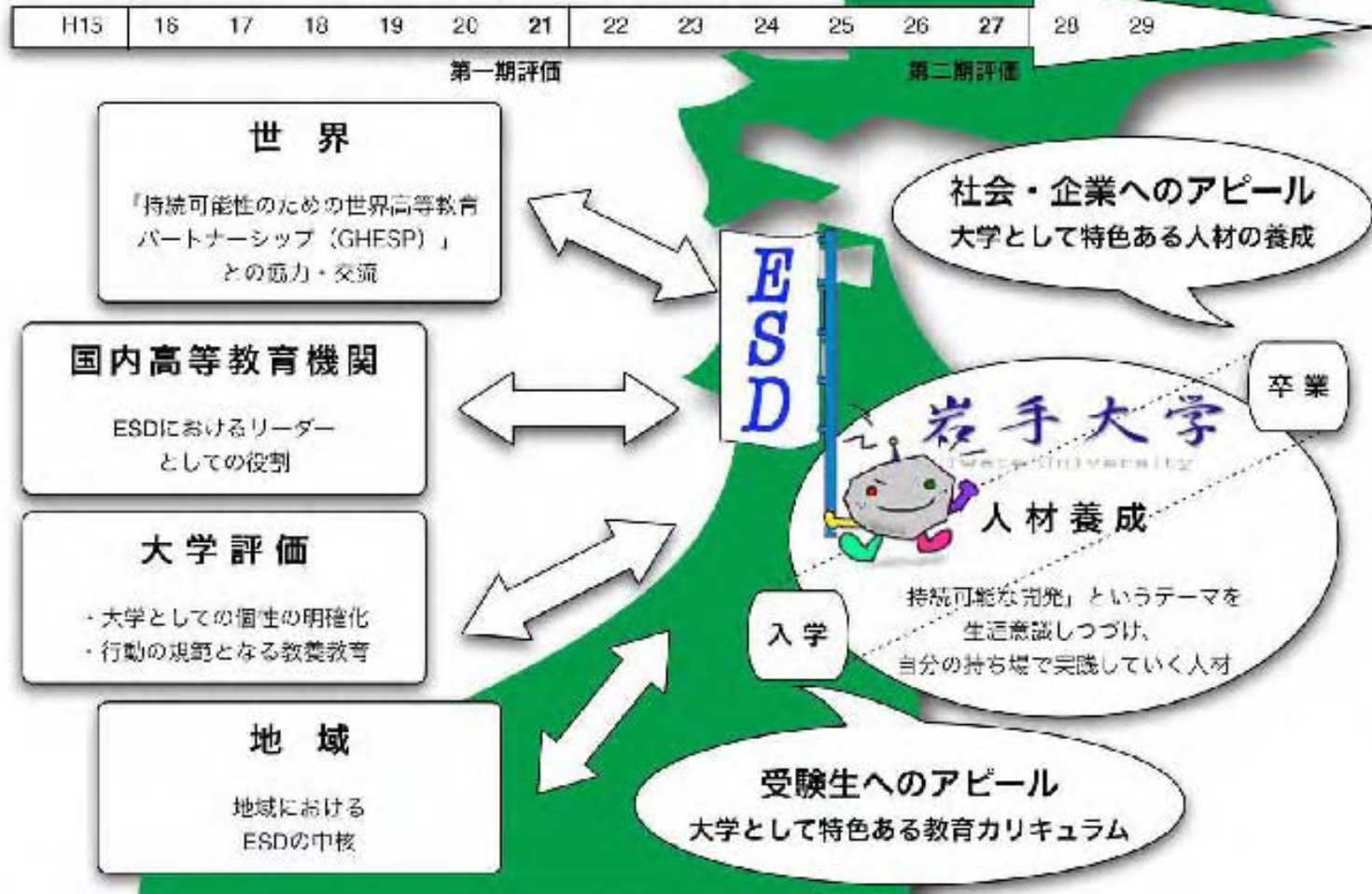
・学部から「履修証明」

全学共通教育と専門教育との有機的に結合した
学士課程教育

国連・持続可能な開発のための教育の10年

ESD 10年

Education for Sustainable Development : ESD



プロジェクトの背景とねらい(1)

- ・教養教育の再構築は大学が共通に直面する課題

1991年の設置基準大綱化により

教養部解体：一般教育担当教員の消滅

新たな全学的実施体制：大学教育センター

全教員の関心・責任・協力による教育

求められる大学としての特色

- ・実態は、教員・学生共に関心が低調

- ・1つひとつは優れた授業でも、全体の目標やつながりが見えず、結局は知識の断片の集合＝教育プログラムと言えない

プロジェクトの背景とねらい(2)

- ・ESDは関心と協力、目標と特色を示す「旗印」

 - 「目標の共有」こそが打開のカギ

 - 担当する教員、受講する学生が共通に意識

- ・全入時代：学生には現実社会とのつながりを示す

 - エリートの証としての教養ではなく、学生が「学ぶ意味」を
しっかり理解できるように示すことが必要

 - 幅広く学ぶ意味：すべては相互に関連し合いつながっている

 - =4つの領域設定

 - 知識を行動に移さなければ、持続可能な社会は作れない

 - =4つのタイプ設定

プロジェクトの背景とねらい(3)

・環境教育の進化としてのESD

平成12年度から環境教育科目を開設

「環境」を考える: 人文社会科学部担当

生活と環境: 教育学部担当

都市と環境: 工学部担当

農業・生命と環境: 農学部担当

・本学の教育目標

「環境問題をはじめとする複合的な人類的諸課題に対する基礎的な理解力」「柔軟な課題探求能力と高い倫理性」

・EEとESDのリンク

＝共通教育の体系化ではなく、ネットワーク化

プロジェクトの背景とねらい(4)

・大学の権威の低下

少子化による競争激化の下で、大学は個性化・多様化・資格化・実用化へ直走る

政府によるあからさまな国内経済活性化への貢献要求

規制緩和により予備校が大学と認められる時代

中教審答申「我が国の高等教育の将来像」(2005)「大学とは何か」「大学は危機」

・いま必要なのは大学が高等教育機関としての見識を示すこと

人類的課題・普遍的課題に対する組織的な取組

困難さと今後の展望(1)

・最大の困難は教員の多忙化と意識

定員削減、業績評価のプレッシャー、教育負担増、社会貢献、入試業務の増加、高校訪問、etc

・自らの専門分野をSDの観点から見直す余裕がない:狭い専門分野の枠からでられない

リオも知らなければ、ヨハネスブルクも知らない、ESDを改めて学ぶ余裕もない→学生と一緒に学ぶ姿勢になれるか?

・依然として研究センターで、教育者としての自覚は低い: →組織的な教育プログラムが未成熟

困難さと今後の展望(2)

・学長のリーダーシップの弱さ

1992年のリオ地球サミットに反応して行動を起こした学長や大学は、日本になかった。内向きの大学改革

・**ULSF** (The Association of University Leaders for Sustainable Future) 1992

・コペルニクスキャンパス

The University Charter for SD 1993

・日本の提案で採択された国連「ESDの10年」に学長が反応しないのはおかしい？

困難さと今後の展望(3)

・ESDの社会的、政治的認知度の低さ

UNECE:UN Economic Commission for Europe(アメリカ・カナダを含むヨーロッパ55カ国)と比較すれば

- ・2003:キエフ大臣級会議Environment for Europe: Ministerial Statement on ESD
- ・2004:ESDタスクホースによるESD戦略のドラフト化
- ・2005:ESD戦略を採択 Vilnius Framework
- ・2007:環境大臣・教育大臣によるESD共同声明
→国連「ESDの10年」への積極的に取組

困難さと今後の展望(4)

- ・大学教育の新しい国際通用性
- ・ボローニャ・プロセス:2010年までに「欧州高等教育圏」を確立:学位制度などを統一化し、欧州高等教育の競争力と魅力を高める
- ・2005: Bergen Communiqué : the Bologna Process should be based on the principle of sustainable development.
- ・2006: International Conference “Sustainable Development in the European Higher Education Area” at University of Oldenburg (Germany)
- ・2007: "**Education for Sustainable Development (ESD) in practice in Higher Education**" Baltic University Programme Teachers conference, 20-24.05. in Lodz Poland. 22

困難さと今後の展望(5)

- **教員の意識喚起がカギ:自ら学ぶ**
学長のリーダーシップ! (大学経営だけでなく)
- **テキストと教材作成の重要性**
学生向け(基礎ゼミ用etc)、教員向け
- **大学間ネットワークの構築**
国内で、ヨーロッパと、アジアで
- **大学が地域におけるESDの中核となる**
小中高大連携、自治体、民間企業との連携

ご静聴、ありがとうございました。